

## パーソナリティ・テストを通してみた 大学生の性格特性の逐年変化

寺 崎 正 治\*

従来より、我々の研究室では、実験的研究との係わりで、モーズレイ性格検査 (Maudsley Personality Inventory, MPI) を関学生を対象に施行して来た。その結果、10数年間にわたる性格検査の資料が蓄積し、今回これらの資料をまとめる機会が与えられた。

今回のまとめは、主に次の諸点を中心に行なった。

(1) MPI は、向性尺度 (E 尺度)、神経症的傾向尺度 (N 尺度)、虚偽発見尺度 (L 尺度) から成り立っており、関学生に MPI を施行した場合の各尺度得点 (E, N, L 得点) の年度毎の平均値と標準偏差値を紹介する。さらに近年、各尺度得点が以前に比べ変化して来ているという印象を得ているため、今回資料を整理し、客観的に検討を加えてみることにした。

(2) しかし、本検査は当初から、学生集団の性格特性の逐年変化を調べることを目的として施行されて来たわけではなく、標準的な調査法に基づいた標本抽出はなされておらず、標本の偏りの可能性はまぬがれない。そこで、比較対照のために、一校ではあるが他大学で施行した MPI の結果も併せて紹介する。

(3) 得点の変化が認められた尺度に関しては、その内容をより明確にするため、尺度を構成している個々の項目に対する応答内容の変化について検討する。

(4) 今回報告する資料の一部は、岸本・今田 (1978) が紹介しており、その内

---

\* 本研究は園田学園女子短期大学、古賀愛人教授と共同で進めて来た調査の一部をまとめたものである。さらに、本論文の作成にあたっては、関西学院大学、今田寛教授に有益な御助言を賜りました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

でE得点に関して性差と学部差が報告され、またN得点に関して学部差が報告されているが、このような傾向がその後もみられるのか否かについて検討する。

## 方 法

### (1) 分析の対象となった資料

本研究で用いた MPI は、Eysenck (1953) により作成されたものを日本で標準化したものである (MPI 研究会, 1969)。今回、分析の対象となった資料は、1970年から1984年の間に、関西学院大学生を対象に施行されたものである。他大学で行なった MPI の結果は、兵庫県内の S 女子短大生のもので、1972年から1984年の間に施行されたものである。但し、1973年と1974年の関西学院大学の資料と、1977年の S 女子短大の資料は粉失しており、今回の処理から除外されている。また、1970年から1972年にかけての関西学院大学の資料は、各個人の尺度得点の記録のみが存在しており、各項目への応答に関するデータは粉失しているため、個々の項目への応答率の変化をみるための資料としては用いられなかった。

### (2) 回答者

関西学院大学の資料は、1970年が文学部の各基礎ゼミナールの学生を対象にしたものである以外は、一般教育科目の心理学を受講している学生を対象にして得られたものである。S 女子短大の資料は、心理学関係科目を受講している学生を対象にして得られたものである。Table 1 に、関西学院大学の資料に関しては分析の対象となった回答者数を、年度、学部、性別毎に示した。また、各年度毎に男・女回答者の平均年齢を示した。S 女子短大の資料に関しては、各年度毎の回答者数および回答者の平均年齢を示した。

### (3) 検査の施行時期および方法

本検査は、毎年4月下旬から6月にかけて、講義時間の一部を利用して行なわれた。調査の目的と記入方法を簡単に説明した後、時間制限を設けずに自由に記入してもらっている。

Table 1 各年度の回答者の性別、学校別、学部別人数と平均年齢

年度	性別	関西学院大学											S女子短大			
		法	文	商	経	社	理	神	その他	小計	合計	平均年齢	合計	平均年齢		
1970	男	121								121	486	19.0				
	女	365								365		19.0				
1971	男	3	38	4	16	52	55			168	424	18.8				
	女		198		1	46	11			256		18.5				
1972	男	5	67	11	13	6	76			178	543	18.6	152	18.6		
	女		327			23	14	1		365		18.3				
1973	男														254	18.9
	女															
1974	男														123	18.2
	女															
1975	男	14	48	55	84	66	30	1	2	300	588	19.3	374	18.8		
	女	2	143	2	10	116	14		1	288		18.9				
1976	男	63	61	9	238	7	1			379	579	19.1	259	18.3		
	女	6	175		8	11			200	18.5						
1977	男	115	52	146	27	15	1			365	535	19.1				
	女	12	104	16		28		9	10	170		18.5				
1978	男	88	60	98	75	90	48	2			461	777	19.3	455	18.9	
	女	20	166	6	5	106	11	2			316		19.1			
1979	男	27	90	48	62	101			5	333	640	19.1	502	18.6		
	女	7	181	8	4	100		7		307		18.7				
1980	男	83	62	85	114	6	57			407	593	18.9	467	18.6		
	女	7	134	7	9	8	21			186		18.6				
1981	男	183	110	49	208	13	93	1			657	972	18.9	316	18.9	
	女	24	240	7	6	25	13			315	18.6					
1982	男	50	76	177	159	28	3	1			494	678	18.9	550	18.7	
	女	6	146	12	5	15			184	18.6						
1983	男	105	76	63	134	12	58			448	665	18.9	441	18.6		
	女	11	180	4	4	5	12	1				217			18.6	
1984	男	86	41	57	139	12	76	3			414	599	19.1	364	18.7	
	女	11	140	3	5	8	14	4			185		18.4			
計										8079		4257				

検査用紙の書式は、現在に至るまでに3度変更されている。まづ、1974年までは質問と回答欄が一体となった小冊子を用いた。1975年から1978年の間は、質問冊子と回答用紙を別にしたものを用いた。これは、質問冊子を何度も使用することを目的とした変更であった。1979年以後は、回答用紙をマークシート方式に改

めている。これによって結果の電算機処理が一段と容易になった。

## 結 果

### (1) E, N, L 得点の逐年変化

Table 2 関学男子, 女子, S 女子短大生の年度別 E, N, L 得点の平均値と標準偏差値

年度	関学男子			関学女子			S 女子短大		
	E	N	L	E	N	L	E	N	L
1970	27.3 (10.1)	27.8 (12.9)	10.4 ( 5.9)	27.9 (10.5)	26.3 (10.5)	11.5 ( 5.6)			
1971	26.5 (12.1)	27.9 (11.1)	10.1 ( 5.4)	27.8 (11.1)	27.7 (10.8)	10.1 ( 4.9)			
1972	24.8 (12.0)	25.9 (10.9)	10.9 ( 5.3)	26.5 (11.7)	24.7 (11.2)	11.4 ( 6.1)	30.3 (10.4)	24.1 ( 7.9)	12.9 ( 6.0)
1973							29.6 (10.7)	25.8 ( 8.4)	10.8 ( 5.4)
1974							33.0 (10.0)	25.8 ( 7.6)	11.0 ( 5.2)
1975	28.3 (11.2)	26.6 ( 7.7)	10.1 ( 5.4)	29.1 (11.5)	26.5 ( 7.2)	10.4 ( 5.3)	32.8 (10.0)	25.5 ( 7.6)	9.9 ( 4.9)
1976	26.9 (11.9)	25.4 ( 8.0)	10.0 ( 5.6)	27.5 (11.5)	26.3 ( 7.0)	10.2 ( 5.0)	31.6 (10.8)	26.4 ( 8.0)	10.6 ( 5.0)
1977	24.9 (12.0)	26.6 ( 8.3)	9.8 ( 5.5)	28.3 (11.2)	25.8 ( 8.0)	10.3 ( 5.1)			
1978	27.4 (12.5)	26.4 ( 8.5)	9.8 ( 5.3)	29.8 (11.6)	26.1 ( 7.8)	10.1 ( 5.2)	33.9 ( 9.9)	25.3 ( 7.2)	10.1 ( 4.9)
1979	27.6 (12.7)	26.5 ( 8.6)	9.7 ( 5.1)	28.6 (11.2)	26.1 ( 8.1)	9.8 ( 5.1)	33.7 ( 9.7)	25.6 ( 7.5)	9.4 ( 4.5)
1980	26.9 (12.5)	24.0 ( 8.9)	10.5 ( 5.4)	29.5 (11.9)	23.9 ( 8.1)	10.5 ( 5.3)	33.7 (10.2)	24.3 ( 7.3)	10.1 ( 5.1)
1981	28.3 (12.2)	24.7 ( 8.4)	10.7 ( 5.3)	30.7 (11.4)	24.8 ( 7.9)	11.1 ( 5.2)	34.5 (10.2)	23.9 ( 7.5)	8.3 ( 4.4)
1982	29.1 (12.2)	24.4 ( 8.5)	9.6 ( 5.1)	30.3 (12.0)	23.9 ( 8.2)	10.5 ( 5.3)	33.7 ( 9.4)	22.9 ( 7.7)	9.8 ( 4.7)
1983	28.5 (12.2)	23.8 ( 8.6)	9.7 ( 5.2)	30.5 (11.6)	24.7 ( 7.4)	9.9 ( 4.8)	35.8 ( 9.2)	22.7 ( 7.8)	9.4 ( 4.6)
1984	27.6 (11.9)	24.0 ( 8.4)	9.9 ( 4.9)	28.7 (11.9)	25.2 ( 7.7)	10.1 ( 4.8)	35.2 ( 9.2)	21.7 ( 8.5)	10.2 ( 4.9)

Table 2 に、関西学院大学、男・女学生および、S女子短大生のE、N、L得点の平均値と標準偏差値を年度毎に示した。なお、E得点の範囲は0～48点であり、得点が高くなる程、外向的であることを示す。N得点の範囲は同じく0～48点であり、得点が高くなる程、神経症的傾向が強いことを示す。L得点の範囲は0～20点であり、得点が高くなる程、自分をよくみせかけようとする傾向が強いことを示す。

次に、得点の逐年変化について、個々の尺度毎にみていくことにする。

Fig.1 は、関西学院大学、男・女学生およびS女子短大生の外向性得点(E得点)の平均値の逐年推移を示したものである。また、図中には参考のためにMPI研究会(1969)が標準化の時点(1963)で、男子大学生410名、女子大学生433名を対象に行なった調査結果も併せて示した。

関西学院大学、男・女学生の得点推移については、1973年、1974年の2年間のデータが欠落しているが、この2年間の空白を無視し、1970年から1984年を連続

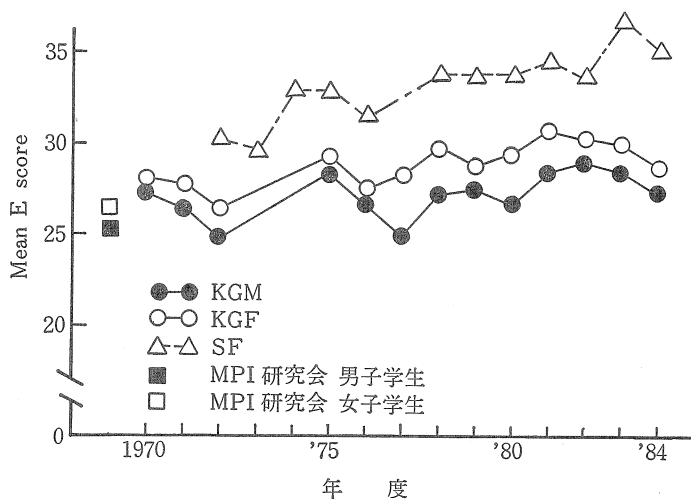


Fig. 1 関西学院大学 男子 (KGM)、女子 (KGF)、S女子短大生 (SF) のE得点の推移

している13年間とみなして傾向検定を行った（以後、同様の方法で検定を行なっている）。

Fig.1 より、関学男子学生におけるE得点の変化をみると、年度によって増減をくりかえしながらも、ゆるやかに得点が上昇していく傾向がうかがえる。同様の傾向が女子学生の場合にも見られる。分散分析を行なったところ、男子におけるE得点の年度差が有意（ $F=3.72$ ,  $df=12/4717$ ,  $P<.01$ ）であり、その内、直線回帰による（一次の）変動が有意（ $F=5.98$ ,  $df=1/11$ ,  $P<.05$ ）であった。同様に、女子においてもE得点の年度差が有意（ $F=3.38$ ,  $df=12/3349$ ,  $P<.01$ ）であり、その内、一次の変動が有意（ $F=12.24$ ,  $df=1/11$ ,  $P<.01$ ）であった。

次に、S女子短大生の得点推移についてであるが、ここにおいても1977年のデータが欠落しているため、この一年間の空白を無視し、1972年から1984年にかけてのデータを連続した12年間のものとみなして、傾向検定を行なっている（以後、同様の方法で検定を行なった）。Fig.1 より明らかなように、1972年から1984年にかけて、顕著にE得点が増加している。分散分析の結果、得点の年度差が有意（ $F=9.66$ ,  $df=11/4245$ ,  $P<.01$ ）であり、その内、一次の変動が有意（ $F=29.65$ ,  $df=1/10$ ,  $P<.01$ ）であった。

このように、関学の男・女学生、S女子短大生のいずれの群においても、E得点は年々上昇していく傾向を示しており、近年、外向的傾向が強まって来ていることが示された。

Fig.2 は、E得点の場合と同様に各群における神経症的傾向得点（N得点）の逐年推移を示したものである。

関西学院大学、男・女学生は、ほぼ同様な得点の減少傾向を示しており、比較的顕著な得点低下が1979年を境にみられる。男子学生について、分散分析を行なうと、得点における年度差が有意（ $F=7.35$ ,  $df=12/4717$ ,  $P<.01$ ）であり、その内、一次の変動が有意（ $F=27.95$ ,  $df=1/11$ ,  $P<.01$ ）であった。関学女子学生に関しても、同様に、得点の年度差が有意（ $F=3.89$ ,  $df=12/3349$ ,  $P<.01$ ）であり、一次の変動も有意（ $F=6.39$ ,  $df=1/11$ ,  $P<.05$ ）であった。

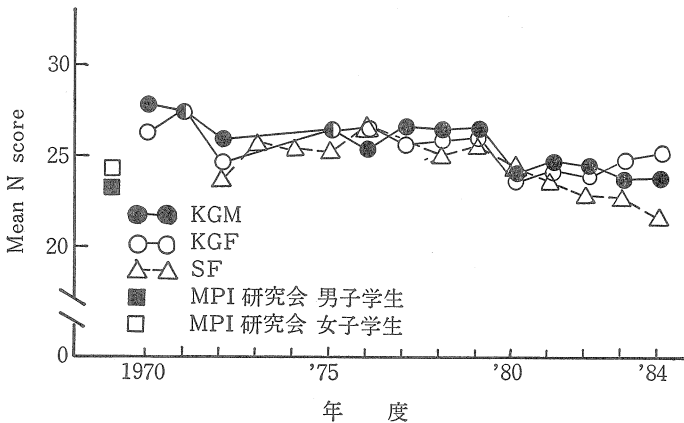


Fig.2 関西学院大学 男子 (KGM), 女子 (KGF), S女子短大生 (SF) のN得点の推移

次に、S女子短大生の得点推移であるが、1976年以後直線的な減少傾向を示している。分散分析の結果、得点の年度差が有意 ( $F=12.94$ ,  $df=11/4245$ ,  $P<.01$ ) であり、一次の変動も有意 ( $F=21.55$ ,  $df=1/10$ ,  $P<.01$ ) であった。

このように、N得点はいずれの群においても近年減少して来ている。

Fig.3 は、各群におけるL得点の逐年変化を示したものである。関西学院大学、男・女学生においては、いずれもL得点の一定方向への変化は、ほとんどみられない。分散分析の結果、男子学生においては、得点の年度差は有意 ( $F=2.13$ ,  $df=12/4717$ ,  $P<.05$ ) であったが、一次の変動は有意でなかった ( $F=0.38$ ,  $df=1/11$ )。同様に、女子学生においても、得点の年度差は有意 ( $F=3.34$ ,  $df=12/3349$ ,  $P<.01$ ) であったものの、一次の変動は有意でなかった ( $F=2.67$ ,  $df=1/11$ )。ところが、S女子短大生の場合には、わずかではあるが、L得点の減少傾向が認められる。分散分析の結果、得点の年度差が有意 ( $F=11.54$ ,  $df=11/4245$ ,  $P<.01$ ) であり、さらに、一次の変動も有意 ( $F=5.31$ ,  $df=1/10$ ,  $P<.05$ ) であった。

以上のように、近年になるにしたがい、E得点の上昇、N得点の減少が、関西

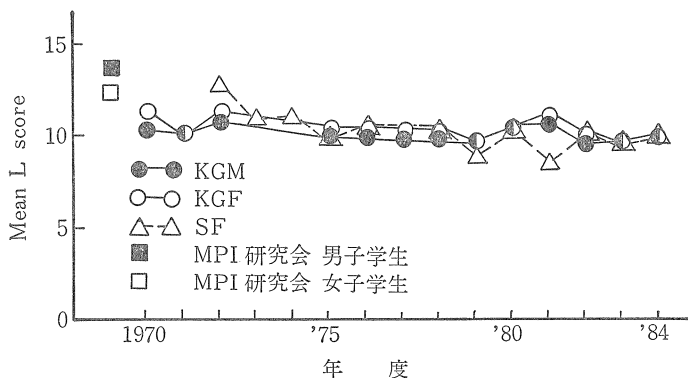


Fig. 3 関西学院大学 男子 (KGM), 女子 (KGF), S女子短大生 (SF) のL得点の推移

学院大学, 男・女学生およびS女子短大生の全ての群に共通に認められたが, L得点においては, 共通した傾向は認められず, わずかな減少傾向が一部の群に認められたにすぎなかった。但し, L尺度は, 本来, パーソナリティ特性を測るための尺度ではなく, 「自分をよくみせかけよう」とする傾向に起因する得点の歪みをチェックしようとするためのものであるが, 単にこのような防衛的虚言傾向ばかりでなく, 社会的関係における従順さの程度を測定しているのではないとも言われている (Eysenck, 1983)。

(2) E, N項目に対する応答内容の逐年変化

今回調査の対象となった全ての群において, 年度に伴うE得点の上昇とN得点の下降が認められ, 一般的な傾向として, 近年, より外向的になり, 神経症的傾向が減少していることが示された。そこで, 外向的傾向の増大および神経症的傾向の減少について, その内容をより具体的に明らかにするため, E, N各項目に対する応答内容の逐年変化を検討した。

関西学院大学, 男・女学生に関しては, 1975年から1984年の10年間の資料を用い, E, N, 各24項について応答内容の変化を傾向検定した。項目に対する応答には「はい」、「?」、「いいえ」の3件法が用いられているが, 「はい」に対する応



答率に着目し、年度と共に応答率が単調減少または単調増加しているか否かを検定した。S女子短大生の資料に関しては、1972年から1984年のものを用い、同様に傾向検定を行なった。

Table 3 関学男子、女子、S女子短大生における各E項目への「はい」に対する応答率の逐年変化に関する傾向検定結果 ( $X^2$ 値)

項目番号	関学男子	関学女子	S女子短大
3	9.60 ** ↑		28.60 ** ↑
6			5.49 * ↑
13		6.19 ** ↑	101.15 ** ↑
29			13.26 ** ↑
37			27.16 ** ↑
44	13.34 ** ↑	9.04 ** ↑	54.49 ** ↑
46	7.42 ** ↑	6.82 ** ↑	25.32 ** ↑
47	11.03 ** ↑	6.96 ** ↑	5.56 ** ↑
51			67.21 ** ↑
56			61.27 ** ↑
57	24.48 ** ↓		12.73 ** ↑
60			29.32 ** ↑
61			16.33 ** ↑
66	12.35 ** ↑	5.45 * ↑	103.85 ** ↑
70			
79	8.37 ** ↑	4.78 * ↑	54.01 ** ↑
80			56.80 ** ↑
逆転項目			
1	7.92 ** ↓	4.76 * ↓	25.39 ** ↓
7	7.84 ** ↓		
14	6.75 ** ↓	4.26 * ↓	12.10 ** ↓
20			5.23 * ↓
31			19.65 ** ↓
注(1)			
41	4.78 * ↓		5.14 * ↓
75	4.96 * ↓		

注(1) これらの項目は「はい」に回答しないことにより外向得点が増加する。

\*\*  $P < .01$   
 \*  $P < .05$   
 ↑ 応答率上昇  
 ↓ 応答率減少

Table 3 は、E項目、全24項目に対して、年度に伴う応答内容の変化を各群毎に傾向検定した結果を示したものである。5%以下の危険率で有意であった項目に関して、 $X^2$  値を示した。Table 3 より、関学男子においては、24項目中12項目に有意な応答内容の変化が認められた。これらの変化は、No. 57 の項目（「自分は陽気な人間だと思いますか」）を除いて、いずれも外向方向への応答内容の変化であった。関学女子においては、24項目中8項目に有意な変化が認められ、これらは全て、外向方向への応答内容の変化であった。

これらの応答内容の変化のみられた項目の内、関学男子、女子、S女子短大の3群に共通に変化が認められた項目は、7項目あり、その内容を Table 4 に示した。これより明らかなのは、No 47 の項目を除くと、これらの項目はいずれも、友達との交際や社交的なつきあいに関する質問項目である。これとは逆に、3群に共通して変化が認められなかった項目は、No 70（「新しい場所や新しい環境などにすぐなれる方ですか」）の一項目のみであった。

Table 4 関学男子、女子、S女子短大生の3群に共通して応答内容の逐年変化が認められた質問項目と共通して変化のなかった質問項目（E尺度）

応答内容に変化有り	
項目番号	質問内容
44	自分は話し好きな方だと思いますか。
46	いろいろな人との交際ができなくなったとしたらつらいですか。
47	活動的な仕事に参加している時が一番楽しいですか。
66	社交的な集まりに顔を出すのが好きですか。
79	たいてい自分の方からすすんで新しい友達をつくれますか。
1	自分が気に入ったわずかな人としかつきあわない方ですか。
14	異性のまえばでは、はずかしがる方ですか。
応答内容に変化無し	
項目番号	質問内容
70	新しい場所や新しい環境などにすぐなれる方ですか。

Table 5 は、N項目に関して年度に伴う応答内容の変化を傾向検定した結果を示したものである。関学男子においては、24項目中18項目に有意な応答内容の変化が認められ、これらはいずれも神経症的傾向が減少する方向への変化であった。

Table 5 関学男子、女子、S女子短大生における各N項目への「はい」に対する応答率の逐年変化に関する傾向検定結果 (X<sup>2</sup>値)

項目番号	関学男子	関学女子	S女子短大
4	20.31 ** ↓	3.82 * ↓	16.66 ** ↓
10	31.99 ** ↓	3.57 * ↓	8.35 ** ↓
16	31.47 ** ↓	16.36 ** ↓	110.21 ** ↓
17			
18	11.33 ** ↓	4.72 * ↓	24.22 ** ↓
25	4.79 * ↓	9.16 ** ↓	5.30 * ↓
26	10.93 ** ↓		48.13 ** ↓
27			10.56 ** ↓
32	11.28 ** ↓		19.44 ** ↓
35	52.25 ** ↓	9.76 ** ↓	62.34 ** ↓
38	17.07 ** ↓	4.49 * ↓	12.30 ** ↓
39	25.71 ** ↓	6.04 * ↓	14.86 ** ↓
42			
48	30.45 ** ↓	10.62 ** ↓	19.50 ** ↓
50	73.60 ** ↓	5.40 * ↓	
54		5.76 * ↓	
59	7.26 ** ↓		5.84 * ↓
63	48.10 ** ↓	43.99 ** ↓	102.60 ** ↓
64	5.98 * ↓		6.40 ** ↓
65			5.58 * ↓
68	13.22 ** ↓	5.76 * ↓	
71			
76	63.46 ** ↓	5.05 * ↓	36.08 ** ↓
78	12.04 ** ↓		26.16 ** ↓

\*\* P<.01

\* P<.05

↑ 応答率上昇

↓ 応答率減少

関学女子においては、14項目に有意な応答内容の変化が認められ、これらはいずれも神経症的傾向が減少する方向への変化であった。S女子短大生においては、18項目に有意な応答内容の変化が認められ、これらは全て神経症的傾向が減少する方向への変化であった。

Table 6 に、関学男子、女子、S女子短大生の3群に共通して、応答内容に変化が認められた11項目と、共通して変化が認められなかった3項目を示した。共

Table 6 関学男子、女子、S女子短大生に共通して応答内容の逐年変化が認められた質問項目と共通して変化しなかった質問項目（N尺度）

応答内容に変化有り	
項目番号	質問内容
4	まったくおこりそうもないことを空想することがよくありますか。
10	気分がくしゃくしゃすることがよくありますか。
16	ひとりぼっちだと思ふことがよくありますか。
18	決心するのが遅すぎたとくよくよしますか。
25	気持を集中しようとして、いつも気が散ってしまいますか。
35	いろいろな考えが次々と頭に浮んで眠れないことが多いですか。
38	空想にふけるのが好きな方ですか。
39	はっきりした理由もないのに、なにをするのもめんどろでつかれた感じがすることがしばしばありますか。
48	楽しかった時の思いでに長い間ふけていることがしばしばありますか。
63	まったく理由もないのにとてもみじめだと感じたことがありますか。
76	心配事で眠れないことがよくありますか。
応答内容に変化無し	
項目番号	質問内容
17	いろいろなことに神経過敏ですか。
42	元気いっぱいの時があるかと思うとひどく気がめいている時もあるというふうですか。
71	陽気になったりふさぎこんだり気分がよく変わりますか。

通に変化した質問項目の内容は、空想傾向 (No 4, 38, 48), 抑うつ気分・孤独感 (No 18, 16, 39, 63), 集中困難や睡眠障害 (No 25, 35, 76, 10) に関するものであった。これに対して、3群に共通して応答内容に変化のみられなかった質問項目の内容は、回帰的気分変動傾向 (No 42, 71), 神経過敏 (No 17) に関するものであった。

### (3) 性差, 学部差, 学校差

まず、関西学院大学男子学生と女子学生の比較を通して、性差について検討する。Fig. 1 から Fig. 3 を通して明らかのように、ほぼ一貫して女子のE得点は男子に比べ高い傾向を示しているが、N得点、L得点に関しては、性差はほとんど認められない。E, N, L得点に関して、年度毎に男・女の平均得点の差をt検定したところ、まずE得点に関しては1977年 ( $t=3.11, P<.01$ ), 1978年 ( $t=2.70, P<.01$ ), 1980年 ( $t=2.38, P<.05$ ), 1981年 ( $t=2.93, P<.01$ ), 1983年 ( $t=2.01, P<.05$ ) の主に1977年以後の5年間に有意差がみられた。N得点に関しては全年度を通して有意差はみられず、L得点に関しては1982年 ( $t=2.02, P<.05$ ) のみに有意差がみられたにとどまっている。

次に学部差について検討する。学部差の検討にあたっては、関学女子およびS女子短大のデータは比較的一部の学部または学科に偏っているため、関学男子のデータのみを用いた。Table 7 に1970年から1984年の資料を合わせた各学部毎のE, N, L得点の平均値と標準偏差値を示した。但し、神学部に関しては回答者の総数が少ないため、分析から除外した。まず、E得点についてであるが、得点の高い学部から順に、商, 経, 法, 理, 文となっている。分散分析の結果、学部差が有意 ( $F=3.47, df=5/4695, P<.01$ ) であった。しかし、個々の学部間の得点差をRyan法を用い下位検定したが、有意差は認められず、個々の学部間の差を同定することは出来なかった。次にN得点は、得点の高い学部から順に、社, 文, 法, 商, 経, 理となっている。分散分析の結果、学数差が有意 ( $F=13.44, df=5/4695, P<.01$ ) であった。Ryan法を用い学部間の対比較を行なうと、5%水準の危険率で社会学部と文学部のN得点は他学部のN得点に比べ有意に高かった。最

Table 7 学部別 (男子) の E, N, L 得点の平均値と標準偏差値

学 部	人 数	E	N	L
		平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
法	822	27.0 (12.4)	24.8 (8.8)	10.3 (5.3)
文	902	26.6 (12.3)	26.9 (9.6)	10.2 (5.3)
商	802	28.5 (11.8)	24.8 (8.4)	9.7 (5.1)
経	1269	28.1 (11.9)	24.6 (8.5)	9.9 (5.4)
社	408	27.3 (11.9)	27.2 (8.8)	9.2 (5.1)
理	498	26.8 (12.7)	24.4 (8.8)	11.3 (5.7)
神	13	32.2 (11.1)	27.5 (6.7)	10.0 (5.0)

後にL得点であるが、得点の高い学部から順に、理、法、文、経、商、社となっている。分散分析の結果、学部差が有意 ( $F=8.88$ ,  $df=5/4695$ ,  $P<.01$ ) であった。同様に Ryan 法を用い学部間の対比較を行なうと、理学部のL得点は他のいずれの学部のL得点よりも有意に高く ( $P<.05$ )、法学部のL得点は社会学部のL得点に比らべ有意に高かった ( $P<.05$ )。

最後に、関学女子とS女子短大生の資料を比較することにより学校差について検討する。Fig.1より、E得点に関しては、S女子短大生は関学女子に比らべ、明らかに高い得点を全ての年度において示している。各年度毎に行なったt検定の結果においても、全年度共、1%水準の危険率で有意差がみられた。Fig.2より、N得点に関しては、近年、S女子短大生の得点の方がより低い傾向がみられる。t検定の結果、1983年度と1984年度において、1%水準の有意差が認められた。L得点に関しては、Fig.3より明らかなように、両群にはほとんど差が無いように思われる。t検定の結果、1972年度と1981年度に、いずれも1%水準で有意差がみられているが、この差は一致した方向を示すものではなかった。

## 考 察

モーズレイ性格検査 (MPI) は、向性と神経症的傾向という2つの主要なパーソナリティ次元を測定している。

関学生を対象に施行した過去15年間の MPI の結果を分析すると、外向的傾向が強まり、神経症的傾向は減少して来ていることが明らかになった。比較のために紹介したS女子短大生を対象に行なった MPI の結果においても、同様の傾向がより顕著に示された。今回紹介した資料は限定された集団に関するものではあるが、比較的一致した変化の方向を示していたように思われる。しかし、今回紹介した資料は地域的にも限られ、これを一般化するには慎重であらねばならないであろう。また、外向化傾向、神経症的傾向の減少といった現象がもたらされた背景については、社会・文化的観点からの分析・考察が必要になるであろうが、ここでは近年行なわれた他の関連する調査事実を簡単に紹介するにとどめておきたい。そして最後に、MPI の作成者である Eysenck が仮定しているパーソナリティ理論との関連について考察する。

### (1) 外向化傾向について

各E項目の応答内容の変化を分析した結果、関学男子・女子、S女子短大の3つの群に共通に変化のみられた項目は、友人との交際に代表されるような社会的特性に関するものであった。すなわち、年々、社会的になって来ているという結果が得られた。

関西学院大学総合教育研究室 (1977, 1980, 1983) が関学生を対象に行なっているカレッジ・コミュニティ調査においても、このような現象と関連すると思われる事実がいくつか報告されている。例えば、余暇の過ごし方に関して「友人とのつきあい」を選択した者の比率は近年高くなって来ている (1977年; 29.1%, 1980年; 28.6%, 1983年; 37.6%)。また、主要な活動の重要度の評定では「クラブ・サークル」に対する評定値が増加する傾向を示している (1977年; 3.17, 1980年; 3.29,

1983年；3.50)。また、これと対応して、クラブやサークルに加入している比率も年々高くなって来ている（1977年；66.6%，1980年；74.7%，1983年；80.6%）。さらに、重要視している人間関係として「クラブ・サークルの仲間」を選択する者の比率は「家族」に次いで2番目に高く、この比率は年々上昇している（1977年；47.3%，1980年；50.8%，1983年；59.1%）。ところが、研究や授業の場での人間関係は、あまり大きな比重を占めていないことが報告されている。

このように性格特性面における社交性を主体とした外向化という現象とこの調査報告書で述べられているような事実は対応しているように思われる。

次に、総理府青少年対策本部（1981）は日本に居住する15才から23才の者を対象に行なった過去2回（1970年と1980年）の調査結果を比較しているが、ここにおいても同様の事実が報告されている。例えば、「あなたは、どんなときに生きがいを感じますか」との問に対して、「友人や仲間といるとき」を選択している者の比率は増加しているが（1970年；38.8%，1980年；58.8%）、「仕事に打ち込んでいる時」（1970年；30.4%，1980年；16.5%）や「他人にわずらわされず、ひとりでいるとき」（1970年；18.1%，1980年；7.7%）は大きく減少している。また、悩みや心配ごとがあった時の相談相手に、「近所や学校の友達」を選択した者の比率が大幅に増加して来ている（1970年；39.5%，1980年；64.0%）。

しかし、この結果を今回の結果と短絡的に結びつけるのは危険であるが、何んらかの対人関係面での変化が、比較的広範囲な現象として生起している可能性も考えられる。さらに、今回見出された、社交性を主体とした外向化という現象の背後に潜むメカニズムについては、より詳細に検討する必要がある。

## (2) 神経症的傾向の減少について

分析の結果、N得点は関学男子・女子・S女子短大の3群とも減少して来ることが明らかとなった。しかし、MPI研究会が1963年に標準化した段階で報告しているN得点は、かなり低いものである（Fig. 2）。この点に関しては、1970年当時、神経症的傾向が特に高くなるような何んらかの社会的背景があったのではないかという可能性と、もう1つはサンプリングにおける地域差の可能性が考



えられる。

次に、神経症的傾向の減少の内容についてであるが、N項目の応答内容の逐年変化を分析したところ、3群に共通して変化がみられた項目が10項目存在した。そして、これらの項目の内容は孤独感や抑うつ傾向、空想傾向、睡眠障害に関するもので、近年これらの傾向が減少して来ていることが明らかになった。これに対して、3群に共通して変化が認められなかった項目が3項目存在した。これらは事物に対する過敏さと循環的な気分の変動に関するものであった。おそらく、変化のみられた項目は、現実に対する不適応の状態と特に関連するような症状を表わしているのではないかと考えられるのに対して、変化のみられなかった循環的な気分変動は内因的な症状とより深く係わっていることと関係するのではないかと考えられる。

神経症的傾向の減少と関連すると考えられる、他の調査事実は比較的少ないが、その中の1つに総理府青少年対策本部(1981)が青少年の悩みや心配ごとについて調査した結果がある。これによると、1980年の時点において悩みや心配ごとが無いと答えた者の比率は、1970年に比らべ2倍以上に増加している(1970年; 10.4%, 1980年; 26.5%)。さらに、悩みや心配ごとの内容においても変化がみられ「勉強・進学」、「就職」は増加しているのに対して、他の項目は全て減少している。特に「政治・社会」、「性格」、「家族」に関する悩みは著しく減少していると報告されている。このように、悩みや心配ごとの内容は、自分にとって身近で現実的なものに限られ、抽象的なものや人間関係に関するものは減少して来ているように思われる。また、これと関連して学校や社会に対する満足感が増加していることが報告されている。同様の調査結果が、関西学院大学総合教育研究室(1981)によっても報告されており、大学生生活に対する充実感は年々増加している(1977年; 27.7%, 1980年; 30.4%, 1983年; 40.3%)。しかし、「大学教育を正面から受け止めているということと充実感が少なくとも直接的には結びついていない」(関西学院大学総合教育研究室, 1981)との指摘もあり、自分の世界を限定した中での表面的な適応に陥っている可能性も考えられる。

### (3) 性差, 学部差および学校差について

今回, 性差が認められたのはE得点においてのみであった。すなわち, 女子は男子に比べ特に1977年以後, より外向的傾向を示すことが多くなった。本来, MPI は性差が生じないように作成されているし, MPI 研究会 (1969) が日本語版を標準化した段階においても, 性差は報告されていない。また, 関西学院大学における1976年以前の資料においては差は認められず, この現象は近年になり初めて出現するようになったものと考えられる。

次に, E, N, L得点に学部差が見い出された。大まかな特徴は, 商学部や経済学部の学生は比較的外向的で神経症的傾向が低い。これに対して, 文学部の学生は内向的で神経症的傾向が高かった。但し, 今回の結果は男子学生のみを対象にして分析したものであることを注意しておきたい。このように, 専攻の種類と性格特性はある程度, 関連するようである。

次に, 学校差についてであるが, 関学女子とS女子短大生を比較すると, S女子短大生が一貫して外向性得点が高かった。このような結果が得られた理由として考えられるのは, 進学先や専攻を選択する時点においてすでに性格特性上のバイアスがかかっていた可能性である。例えば, 短大と4年制大学の違い, また今回分析の対象となったS女子短大生の大部分は幼児教育学専攻の学生であることから, このような専攻上の相違等が考えられるが, 今回の資料のみでは結論は下せない。

### (4) Eysenck のパーソナリティ理論との関係

今回分析を行なったモーズレイ性格検査 (MPI) は Eysenck (1953) が神経症的傾向と向性という2つの独立したパーソナリティ次元を測定するために作成したものである。しかし, 彼は単に性格の記述の水準でのみ, この2つの次元を導き出したのではなく, その背後に, これらの2次元に対応した生物学的基礎を仮定している (Eysenck, 1967)。そして, 記述の水準で得られたパーソナリティ次元を行動的測定や生理的反応を通してとらえられた, パーソナリティのより生物学的側面と関連づけようとする実験的試みがなされて来た (Eysenck, 1967)。さらに, 外

向性や神経症的傾向という性格特性が、生物的に規定されるところが大きいとする証拠の一つに、遺伝的影響が強いことをあげている (Eysenck, 1987)。

もし、MPI によって測定された性格特性が、その背後に仮定された生来的な性格を忠実に反映するものだとすれば、社会的・文化的影響は比較的受けにくいであろうと考えられる。もちろん、質問紙は言語刺激に対する反応をよりどころにしているのであるから、言葉の持つ意味内容が変化すれば、反応も変化するのは当然であるが、今回観察されたような比較的短期間の内での変化は、やはり社会的影響によるものと考えた方が自然である。このことは、Eysenck が意図しているパーソナリティの生物的基礎における個人差を測定する道具として MPI をとらえる場合においては問題が残る。

Eaves と Eysenck (1975) は、MPI の改訂版である EPI を用い、この質問紙が測定している外向性特性はどの程度の割合で、遺伝と環境の影響を受けているのかを推定しようとした。その結果、全得点変動成分の内、約40%は遺伝による変動因に帰着し、残りの約60%は広義の環境に帰着するものであることが明らかになった。この数値から遺伝的な影響が強いとみなすか否かは異論のあるところであろうが、少なくとも質問紙で測定された外向性尺度得点が環境の影響を受けて変化するものであることは否定出来ない。

しかし、尺度を構成している個々の質問項目にたち戻ってみた場合、今回応答内容に逐年変化がみられなかった項目もいくつか存在したことは注目すべきであろう。これらの項目は、社会・文化的影響を比較的受けにくかった項目であろうと考えられる。また、これらの項目は生来の性格を比較的忠実にとらえやすい項目である可能性も考えられる。

例えば、Cattell は彼が見い出した16個の根源的特性因子の内、特に遺伝的影響を受けやすい因子とそうでない因子があることを指摘している。彼は 遺伝的影響を受けやすい根源的特性として、parmia-threctia (脅威に対する大胆さ vs. 敏感さ) と affectothymia-sizothymia (回帰性 vs. 分裂性気質) の2つをあげている (Cattell, 1965, 1982)。

また、Thomas と共同研究者達 (1968) が行なったパーソナリティの縦断的研究においては、すでに新生児の段階において9つの識別し得る行動的特徴や生理的反応の個人差を見い出している。さらに、これらの特徴の内のいくつか (例えば、新しい経験を受け入れる方か、それとも嫌って引っ込み思案な方か。環境の変化に対して、行動を順応させられる方かそうでないか等) は、成長後も比較的一貫して持続することを明らかにした。

このように、観察し得る行動的特徴の内、生来的でより一貫性を持った特徴があるように、質問紙の水準においても、このようなパーソナリティの中核を反映しやすい質問項目が存在するのではないかと考えられる。

今回年度により応答内容に変化がみられなかったという理由のみで、これらの質問項目がそのような項目であるとは断言出来ないが、新しい環境に対する適応の良さや事物に対する一般的な過敏さの程度、気分の回帰的傾向といった特徴を問うているこれらの項目は、Cattell や Thomas 等によってみい出された生来的な行動特徴と内容的には似かよっている。

現在、性格テストに対する批判は多い (日本臨床心理学会, 1979)。批判の一つに、性格テストの多くは社会的価値観に影響された「実際の妥当性」のみを追いもてている点があげられている。人間のパーソナリティに関する科学が健全に発展していくためには、もっと概念的妥当性を追及する試みが質問紙づくりにおいてなされるべきであろう。今回紹介した MPI においても、Eysenck の理論との係わりにおいて、質問紙を構成している項目をより洗練させていく必要性を感じる。

#### 引用文献

- ① Cattell, R. B. The scientific analysis of personality. Harmondsworth : Penguin, 1965.  
(斉藤, 安塚, 米田共訳 パーソナリティの心理学 — パーソナリティの理論と科学的研究一, 東京 : 金子書房, 1981.)
- ② Cattell, R. B. The inheritance of personality and ability : Research methods and findings. New York : Academic Press, 1982.

- Eaves, L., and Eysenck, H. J. The nature of extraversion : A genetical analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1975, 32, 102-112.
- Eysenck, H. J. The structure of human personality. London : Methuen, 1953.
- Eysenck, H. J. The biological basis of personality. Springfield : Thomas, 1967.
- Eysenck, H. J. A biometrical-genetical analysis of impulsive and sensation seeking behavior. In M. Zuckerman (Ed.) *Biological bases of sensation seeking, impulsivity, and anxiety*. London : Lawrence Erlbaum associates, 1983.
- 関西学院大学総合教育研究室. われわれの大学をよく理解するために —カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書—, 1977.
- 関西学院大学総合教育研究室. われわれの大学をよく理解するために(Ⅱ) —第2回カレッジ・コミュニティ調査基本報告書—, 1980.
- 関西学院大学総合教育研究室. われわれの大学をよりよく理解するために(Ⅲ) —第3回カレッジ・コミュニティ調査基本報告書—, 1983.
- 岸本陽一, 今田寛. モーズレイ性格検査 (MPI) に関する基礎調査. *関西学院大学人文論究*, 1978, 28, 3, 63-83,
- MPI 研究会(編). 新性格検査法 —モーズレイ性格検査—, 東京: 誠信書房, 1969.
- 日本臨床心理学会(編). 心理テスト —その虚構と現実—, 東京: 現代書館, 1979.
- 総理府青少年対策本部. 10年前との比較からみた現代の青少年 —青少年の連帯感などに関する調査報告書 第3回—, 総理府, 1981.
- Thomas, A., Chess, S., and Birch, H. G. *Temperament and behavior disorders in children*. New York : New York University Press, 1968.